

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	少年行 : 文苑
Author(s)	寒月生
Citation	龍南會雜誌, 23 : 43 - 45
Issue date	1894-02-07
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4352">http://hdl.handle.net/2298/4352</a>
Right	

之時。微清麻呂。則孝謙必禪位矣。道鏡必踐祚矣。大臣橘諸兄。吉備眞備必不言矣。百萬生靈必爲之臣子矣。清麿便正言直辭。撲凶餓於方熾。回天日於將沒。如清麿所謂一繩維大厦者。非歟。嗚呼。士之有氣節者。當尋常無事之日。則其言行如無異於衆者。必至遭亂逆不祥之事。而後得以見其氣節。所謂時窮節乃見者。故上有道鏡之逆。而後下有清麿出焉。悲矣哉。

少年行 寒月生

いざや進まむすゝみあん

目ざすみやこも間近あり。

日頃はげみしいさをしに

時をおしとつ來まゆゑに

今は人にもさきたちて

月毛のこまもいさむめり』

うしろを見れば雲ひさく

つゞく一騎も見へぬなり。

心やすかりいさはしも

追ひ及ふものさらにあし

乗る我こまのなごはやき

來る人びとのちどねろき』

ふりさけ見れば過々々

野ばらに秋は寂びにけり。

右方に溪ありなゆかし

しける樹立に啼くどりの

とゑはたに間の水おとに

碎けて流るごとくあり』

しばしあそびむおの谷に

こまの足をもやすらへむ。

されど駈け來る人びとに

後れやはせむうれはしゝ  
ひあとよろほきに我は來ぬ

此身ぞ明日の榮えあるを』

あれにぞ見ゆるたに底に

色づくもみちあらふめり。

人目をければひめ百合の

裳裾の下にさをしかの

ねむるゑることの常あるを

あきく薄のまねくあり』

紅葉のみぞ来て見れば

それさへあるにあは如何に。

咲たるむら菊をよくと

こあたの岸を染めぬきて

時れくれたるをみちへし

うしろめたくも立てる哉』

紅葉にこまをつあぎとめ

水のあぎさよたり立ちぬ。

とり出したるひさごより

酌みける酒のあと甘き

をりしも風のろよぎつゝ

寐よやと顔をうつるあり』

菊の下とつやくらにし

老さぬゆめをむすびけり。

時しもこまのいばへつゝ

何に怖ぢけむ駈けんとて

あせるひききに見さむれば

水の面拂ふかせ冷し』

いさむ駒をばといめつゝ

今はとばかりとび乗りて。

跡をし見れば愛でたりし

紅葉は散りてながめなく

笑ふすゝきの葉すへには

映つる夕日の影しろし』

こは我ががらすゝるあり

日のかたむくを知らずして。

躍り出でつゝ目をくばり

鞭をばらげて馳せ行けば

かすかに騎馬の二三

こは羽さかえぬくれたり』

梅花先春

野尻

鶯もまた訪ひやらぬ梅の花

ふくさの風に香をうそへける

長閑けかる御世のしるしを見せんとや

梅さきにけり春まぢもせて

全

杉山

けふ降りし雪まの梅は咲にけり

まぢかき春を人のしるへく

春またてささ出にけり庭の梅

梢にうたふ鶯もかぢ

梅花先春 二首

下山 陸治

降る雪にまじりて匂ふ梅の香に

春待つ人や心よすらむ

春またて咲きにけらしも雪のまに

薫りは高し梅の初花

池水鳥

同

ふけてゆく夜半にや霜のまざるらむ

羽ふさひまゝさ池のむら鳥

大分の縣をさしてあらしの軍よ出立たむ

文苑

とする前の夜故郷の夢を見ければ

同

旅といへは暫しあこりの惜まれて

長き夜あかぬ古郷の夢

我郷里なる鏡の里を見ひと學の友數多來

たりけるに

同

名にしおふ鏡の池は清けれと

うつるさと夏のやどろはつかし

歳暮

同

おこたり乃身まはしはしと思へとも

とよめもあへぬ年のくれかゝ

俳句 (冠句附)

乳 貴 更けし人戸を叩兼

○○

夕 涼 團扇忘れて戻る橋

××

春の風 また薄寒し若菜摘

□□

梅の花 魁愛づる冬籠

××

月に泣く 罪あらぬ身の嶋に暮れ

△△

月の影 明かるうてよし夕涼

□□

帯になる 高嶺の腰を回はる雲

××

電信機 世界を括る球の糸

□□